

源空和讃

平成元年九月十七日講義

立教開宗

「善導源信すすむとも 本師源空ひろめずば

片州汚世のともがらは いかでか真宗をさとらまし」

この和讃について「本師源空ひろめずば」とあります。前には「弘願の一乗ひろめつつ」とある。具体的内容につきましては、やはり『選択集』を書かれて立教開宗ということ成し遂げられた。すなわち浄土宗を開かれたということである。

このことは大変なことで、仏教はインド・中国・日本と伝わって来たわけですけれども、そのインドにおいても中国においても、浄土宗というのはなかった。実に日本において初めて法然聖人においてなされたことであって、そこが大変なお働きであると言わねばならん。

立教とは、仏教の教えの中から中心になる教えを立てるという事で、自分の依り処を明らかにするということである。開宗は、一番大切な行を開き明らかにすることです。

立教という時には、私の依り処を明らかにするために、その仏教を分類し、その価値を判断する、教相判釈というものがあるわけである。その教理の深淺、そこに述べられている教理をいろいろたずねて判断し、その深い方を取ろうというのが教相

判釈である。本当にその教えによって煩惱を解脱するのに役に立つかどうか、教理の深淺というところに重点を置いて分けていく、そして深い方を取るといふのと、それが本当に解脱の方法論として実践価値を持っているかどうか。

従来の教相判釈はすべて教理の浅深によっていた。法然は解脱の方法の実践価値によった。そこに新しい立教、さらに開宗ということがなされてきた。これが法然である。

そこに浄土宗というのを立てたのは、解脱の方法として、普通解脱と言いますが、仏教の目的である仏と成る道、それが確立されるかどうか。そこがその教えの価値判断、基準である。

開宗は、大切な行を明らかにする。従来は立教開宗と言うけれども、開宗というのあまりなかった。従来はどの宗派も結局、立教という教相判釈に終わって、行は大体同じです。菩提心を起こし読誦、そして戒をたもち、そして定、慧という。これはどれも同じです。

涅槃宗というも、華嚴宗というも大体同じである。違っているのは禅宗くらいですが、当時禅宗は認められていなかったのです。そういうわけで行というものについては特に開宗というほどのものはなかった。

本当の立教開宗というものは法然においてあったわけで、法然はその行というのがはつきりしていた。宗とすべきもの、中心となる行。それは選択本願の念仏。大切な行はこれだ。全然今までと違う。そのことが法然によって明らかになった。そこが開宗という名にふさわしい。

広く言えば浄土の一門ということが明らかになったわけでありますが、今日において言えば、新しい宗派を作るというよりも、一人ひとりが立教開宗をするということが大事であると言いうことができましょう。それは本山がやるべきことではなく、一人ひとりが沢山ある教えの中から、私の依るべきものを明らかにする。例えば親鸞聖人は「それ真実の教えを明かさば『大無量寿経』これなり」とはつきりとしておられる。本願の教え、それが私の依り処、それが浄土真実の教えというのです。それを立教と言います。

開宗は如来本願の行、これが親鸞聖人。いわゆる南無阿弥陀仏。本願の行に依るのである。これは遠く法然聖人から戴いたものです。聖人は選択本願念仏といわれた。

仏教の分類

くり返しますように、我々自身も立教開宗というものをもたなければいけない。そういう意味で、人ごとでないわけであり、それが明らかになるということが我が身において仏教が成り立つということである。

仏教とは何かというと、仏の教え、仏となる教え。

仏の教えは沢山あるわけである。従って仏教を求めるとは、仏の教えの中からどの教えを取るか、どの教えに依るか。それが立教である。

仏となる教え、それも一応沢山述べられていると言わねばならぬ。菩提心、読誦、六度の行、その他、戒・定・慧、そのよ

うなものがあるが、最も大切な行は何か。仏となる教えの行は何か。それが開宗である。

本当に我々の上に立教開宗が成されなければならぬ、とこういうことにつながっているのである。一応こういう目標というか、行く先を見つめながら、どのように本師源空は立教開宗しなされたかを戴いていきたい。

まず初めは立教、教相判釈である。教えをどういうふうに分類し、その価値を判断していくかということである。立教開宗ということについて扱われていますのは『選択集』の第一章の二門章である。『選択集』の第一章・二章というのは、そういう番号が打ってあるわけではないのであり、又章の名称が書いてあるわけではないのであります。

第一章は「道綽禪師 聖道浄土二門を立て 聖道を捨てて正しく浄土に帰するの文」、こういう書き出しになっている。第一章とも二門章とも書いてはなく、こういう文章が初め出ているのであります。

二門章というのは、『選択集』を読んだ者が後から付けた題目です。色々な人が読んでおるわけで、この章の題目は、二門章、立教章、教相章、判教立宗章、このように色々な名前がある。

名前から見ますと、この第一章で立教開宗ということになされたというような読み方が多い。立教章とか教相章とか判教立宗章というのは、まさしく立教開宗ということの中で読み取っているのです。

『選択集』には色々な優れた参考書があります。一つは浄土真宗の方にあり、もう一つは浄土宗の方にあります。両方読んで

みるのがいいと思つて読んでおりますが、浄土宗の方の解釈は少し違います。浄土真宗以外の考え方というものも、この際勉強したいと思つて読んでみると、なかなかいいところもあります。思いがけないところもあるが、両方見るのが大事ではないかと思つている。

道綽禪師は『安樂集』を書かれて、聖道門と浄土門とに仏法を分類されたのである。「聖道浄土の二門を立て」というのが新しい仏教の分類なのである。今までそういう分類をしたことがなかった。

従来の仏教の分類は、例えば華嚴宗では五教ということをお説く。どういふものかというところ、

①小乗教 ②始教 ③終教 ④頓教 ⑤円教 この五つです。まず

①小乗教というのを出して、これは自利のみ説いてある。自利他、小乗と大乘に分ける。

②始教はものの初めで、五姓各別という。仏になる人、菩薩になる人、声聞・縁覚で終わる人、仏になれない人等々、このようにその人の個性とか能力というものがあつて、それぞれがある段階までしかいけない。こういうふうに分けて説く五姓各別の教え、『般若経』というものをあげています。

③終教、「一切衆生 悉有仏性」は最後に説かれた教えです。その方が優れている。五姓各別ということをお説いてみんなを励まして求道を勧めたわけであるが、涅槃の教えというものは、皆を最後には仏性ありとして道に立てるようにしている。

④頓教は禪宗。段階を追わず一足飛びに覚りをひらくという教え。

⑤円教、華嚴宗では教えを分類して、『華嚴経』は最も円かな、完全円満な内容を持った教えである、自分のこのお経はここに入るんだと価値判断を致しまして、その教えを立てる。立教といい、一番優れた教えであると力説している。

それが今までの例であつた。その他『法華経』など色々あり、少しずつ違うけれども大体同じようです。教理の内容の深い浅いを分類しまして、自分のところの所与の経典、依り処にしている経典が一番深い心が述べられているのだという。

問題は覚ることができるかどうか

それらと全然違つたものは道綽の立教。聖道・浄土の二門。聖道門は此土入聖。この人生で覚りをひらくという教え。浄土門は往生浄土、彼土入聖の教え。このように仏道を分類した。この分類は、仏道の目的である証果、覚りをひらく、仏になるというところに重点が置いてあつて、教えがどうの、依り処としてのお経がどうのではない。そうではなしに、覚れるかどうか、仏となるかどうかということをお問題として、そこに聖道門と浄土門がある。

聖道門は今不可能である。聖道門は今の時 証し難し。何故か、それは大聖去ること遙か、時代が過ぎ去つてしまった。この教えは何教でもあれ、偉大な指導者がいて、自分の判らないことは直ちに聞いていくということが出来る時には可能であつたけれども、すでに大聖遙かに、彼方に亡くなられてし

まったその時には誰も指導者がいない。そこで出来なくなつた。

『正信偈』には、「道綽決聖道難証」と出ている。『正信偈』というのは非常に大事なところがありまして、これを覚えておくとその人の言われた大事な所がすぐ分かる。

「道綽決聖道難証 唯明浄土可通入」、
「道綽は聖道の証し難きを決し 唯だ浄土の通入すべきことを明かす」 本当に大事なところを言われている。

だからうろ覚えに口にするのでなしに、一字一字知っておるとよく分かるのです。『正信偈』というのは実に大事なところが出ています。『正信偈』をあげる時は聖典を読みながら一字一字押えていくと、読誦というか、今まで聞かせて頂いたことがよくまとまっているということがよく分かります。

もう一つは、自分の心に届く教えを頂いていくということが大事です。それは非常に『正信偈』はよく出来ている。

「信樂受持甚以難 難中之難無過斯」とか

「貪愛瞋憎之雲霧 常覆真信心天」。

貪愛瞋憎の雲霧が常に真信心の天を覆えりという。

「まことにそうであります、南無阿弥陀仏」といつて私の胸を突き刺し教えてくれるところがある。『正信偈』のどこかにあります。そういうふうにかけていくと、機械的に勤行しているのと少し違うのです。本当に載っているということになります。『正信偈』はその二つが大事ではないかと思えます。

今は道綽なんだ。「道綽決聖道難証 唯明浄土可通入」とはこのことを言っている。

生きた仏法とは何か

従来の仏教の分類は、その宗その宗が自分の依り処のお経を立てて、他のお経より優れているのだということを書いて、教理の深淺が中心であった。

新しい分類法は、証果、仏となるということの可能性を問うた。聖道浄土の二門を立てて仏法を大きく分類し、その内の聖道門は今の時には不可能である、この道しかない、と言って浄土門を立てた、と初めに言われている。それを二門章といい、立教章、仏法の中の依るべき教えを明らかにした。教相章、教相判釈をして大切な宗というものをひらく、立教開宗の大切な章であると言っている。

法然聖人はまず『安樂集』によって道綽のこのようなことを述べて、次にこう言っている。法然自身の言葉、私釈と申します。

「今この浄土宗は、もし道綽禅師の意に依らば二門を立てても一切を撰す。この「集」の中に聖道・浄土の二門を立てる意は、聖道をすて浄土門に入らしめんがためなり」

このように二つに大きく分類をした。けれどもその目的は単なる分類ではない。聖道門は不可能であつて浄土門に入らしめんがためなり。浄土門しかないのだ、そういうことを明らかにしようとした。単なる教相判釈ではなくて、本当の仏法、生きた仏法とは何なのかということ、明らかにしようとした

分類なのだということなのです。非常にズバズバつと言ってある。

「今この浄土宗は」、そのところでは「浄土宗」という名前を立てたわけです。「聖道門・浄土門」の浄土門の方を、浄土宗と立てた。「浄土宗は道綽禪師の意に依らば、二門を立ててしかも一切を撰す」。浄土宗の中に一切仏教がある。これしか仏教はないのだ。

非常に凄まじいというか、こういうものを出されたのです。このために法然聖人は流罪になられた。このためにこの人は、七十五才から八十才までの五年間、流し人になって、現代の言葉で言えば刑務所に入られたのです。物凄いことを言う人なんです、この人は。そして親鸞も同じく刑に服したのである。ただ単に分けたのではない。仏法というものを明らかにしようとした。「一切を撰す」である。

「もし道綽禪師の意に依らば」とある。

道綽の意とは、

① 仏教は二門に分かれる

② それは非本願の教えと本願の教えとの二つである。

③ ただ本願の教えのみが仏教である

こういうことを言おうとしている。これは証に約すと言います。証の一点、本当の覚りが得られるかどうか、即ち仏となるかどうかということを中心に言われている。

道綽に依るならば

この二つに分けたということは文句の言いようがない。聖道門と浄土門、本願の教えと非本願の教え、なるほどそれしかないわけだ。どれが優れているかというのは二つしかないのだ。そのうちに本願の教えというものだけが証、「正定聚 当生滅度」という証を与えられるのだ。聖道門は駄目なのだ。これはぐうの音も出ないような分け方です。思いもかけない分け方だった。

「撰す」とはどうだったのかというと、実際は寓宗として華嚴宗も天台宗もどこも、聖道門の各宗にあった。高野山における真言密教の方も、真言密教ということを立てながら、覚りを得られない者は南無阿彌陀仏、弥陀の本願の教えで念仏申して救われていきなさいという、そういうのを寓宗とって、みなその軒下を借りて念仏の入門を持っておったわけです。

禅宗でもそういうのがありました。良寛さんというのは禅のお弟子をした人ですが、「不可思議の弥陀の誓いのなかりせば 何をこの世の思い出にせん」という歌があり、弘法大師もちよつと忘れましたが「南無阿彌陀仏 南無阿彌陀仏」という歌があります。天台の方も勿論、『往生要集』を書いた源信和尚以前からずっと念仏の教えはあつたわけです。

それはみな寓宗で、寓宗というのは宿借りである。軒先を借りているのですけれど、そこに本当の救いがある。「仏教は二つに分かれて、あなたが本当ですよ、と言っている方は駄目なんですよ」という、物凄いものが出てきたんだ。

これに對しどのような文句を言つたらいいか。反駁する方から言つたら「この浄土宗というよなもの新しく立てると言うことがけしからん。元からあるんだ」と言わなきゃいかん。「ちゃんと元からあるんであつて、皆念仏申しとる。だから新しいものを立てる必要はない」と言うのなら反対はできないですな。

法然の真意はどうか。

「もし道綽禪師の意に依らば」とある。

今法然は、道綽の言葉を借りて二門を挙げて価値判断をしてゐるわけであるが、もし依らなければどうなる。この人は「仏教はただ選択本願、念仏の本願の教えだけである」と言われた。聖道門と浄土門と二つあるのでなしに、聖道門というのは捨てるためがある、本当の念仏を信じさせるために説かれておつて、まずこれが入り口である。

仏法は初めから一つしかないんだ。三選の文に示すが如く、一切の帰結は一つしかないんだ。それを今は少し和らげて二つあつた。法然の考えはもう少し強いです。二つあるのではない、一つしかないのだ。それが仏法の帰結であり、いつの世の中にも通用する、どういふ世の中にならうとも仏道というのは選択本願の念仏、これに帰するのだ。こういう趣が、「道綽禪師にもし依つたならば」というところに出ている。

即ちこの人は絶対念仏というか、二つあつた中の今まではこれではなかつたのだが、今はこれでなくてはいかんとしようよな相対的な考えではなしに、非常に強い考え方であつた。そのようにこの人を読むことができる。

付属されたものはただ念仏一つ

『選択集』の第十二章、念仏付属章というところに、もう少し厳しいことを言っています。『観經』第九真身觀の法を積尊は阿難に付属しなかつた。念仏の方を選び取つて、『観經』は念仏の方だけを阿難に付属したのである。『観經』は勿論積尊が生きておられる時である。阿難に付属されたもの。「汝 是の語を持って 是の語を持つとは 無量寿仏の名を持つとなり」である。阿難に付属されたものは、觀に非ず 戒に非ず 菩提心に非ず 定に非ず ただ念仏一つなり。

このことから考えると、聖道門というものが、積尊在世の時には指導者があつて出来たというが、それは『観經』には付属されていないではないか。ただ付属されたのは念仏だけである。そこに仏法があるからである。ここに仏法あればこそ、念仏が付属されているのであつて、本当の仏法とはこれしかないのだ。これが法然聖人の主張です。教相判釈です。立教です。この人はなかなかすごい人ですね、大変な人です。

すべての仏法者の理解。仏法には必要なものが少なくとも四つある、菩提心、読誦、戒、理を知る、この四つがなければ仏法にはならないと、みな考えているが誤りである。そういうものが仏法であるのではない、仏法は念仏なのだ、それが『選択集』の中に堂々と書いてある。ここらを読んだらびつくりします。これは大変な人だなあというのがわかります。

そこから見まして、法然聖人の仏教觀というものは徹底したものです。なぜ徹底しておられるかというと、四十三才まで菩

提心が必要だ、読誦が必要だ、戒が必要だということでも苦勞されたのです。『大藏經』を何度も読んで読んで、そういうところに仏法があるに違いないと思つていたが、なかつたのです。

「一心專念弥陀名号」というところに目が覚めたのです。そして「落涙数千行」、涙を流すこととどまりなく、「嗚呼、ここに道があつたのか」と言つて喜んだ人なのです。ここに道があつたのかとわかつたのです。そして直ちに比叡山を下りて・・・。

物凄い經驗の持ち主であつて「選択本願念仏一つなんだ」と徹底した人です。この人は強いですよ。「この道一つだ、自分は天台宗の軒下を借りて、往生浄土の念仏を説くようなものではないんだ。これは新しい宗を立てなければならぬんだ」「これしかないんだ」という決心がある人です。「頭を七つに割られても自分は何とも思わないんだ」と言つて命をかけておられた。

本当に強いですね。頭が下がります。偉い人です。我々はこういう人の弟子だつたら良かったんだが(笑い)、それにしてもこつちは弱い。それだけの強さがないです。本当に申し訳ないと思います。

もし道綽禪師の意に依らば、二つ立てて、今こちらは駄目なんでこれだけなんだ、と言ふのであります。本当は私はそうは思わない、これしかないんだ、それがこの人の真意、立教開宗なのです。

一たび開きて永く閉じざるもの

第二章の続きです。

「持戒と菩提心と第一義の行（理觀）と読誦大乘は、常の人、特に欲する行なり。これ弥陀の本願に非ず。釈尊附屬の行に非ず」

前の四つの行は、誰も欲するところであるけれども、決してこれらを弥陀の本願とせず、又釈尊は『觀經』においてそれを附屬しなかつた。

最後に有名な言葉があります。

「當に知るべし。隨他の前には暫らく定散の門を開くと雖も、隨自の後には還つて定散の門を閉づ。一たび開きて以後永く閉じざるものは、ただこれ念仏の一門なり」このように優れた文章です。

いろいろな人がいて、釈尊が自分の思うとおりの説法ができない。相手の心に従つて方便の教えを説く時には、暫らく定散の門を開く。定といえは第一義の行、菩提心も定に入るかもしれないませんが、後の持戒と読誦は散です。定散の門を開いて、こういうことをやりなさいというのは隨他の方便である。隨自、自分が本当の教えを説く時には、それは閉じてしまふ。それはもう触れない。捨てるのである。

一たび開きて以後永く閉じざるものは、ただこれ念仏の一門である。そこに仏教があるのだ。仏教はここなのだということ非常に強く言っている。

立教開宗は、我々一人一人がどの教えによつて、そしてどこに大切な行があるのかということ、明らかにする問題である

と申しました。なるほど明快な人というのは、実に尊敬すべきである。

三経一論

もう一つ、法然聖人という人を何うのに大事なことは、三経一論という問題である。浄土門の正依の經典、まさしく浄土を明かすその経論として、三経一論ということを言われたのは法然聖人だけである。

曇鸞は『論註』の中で、王舎城（大経、觀経）、舍衛国（小経）、これによつて天親菩薩は『浄土論』を作られたのだと言っている。

道綽は『安楽集』第五大門の中で、大経と觀経を挙げた。阿彌陀経は挙げなかった。そして、法鼓経その他計六経、その他広く諸経を説いてさらに六経。こういうお経を挙げて、往生浄土するというお聖教が他にあるかという問いを出している。

善導は『觀念法門』の中に「謹んで釈迦の教えに依るに」とあつて、大体六つのお経を挙げてゐる。大経、觀経、阿彌陀経、般舟三昧経、十往生経、浄土三昧経。

中国の浄土教の諸師達は、六経或いは十二通りをあげて、それが往生浄土を語る経であると著書の中に出ているわけです。

法然聖人は、浄土教の中心は大教、觀経、阿彌陀経、それに浄土論を加えて、三経一論と言われた。法然聖人は『選択集』の中に、御自分の考えをぼんと出して、決して善導などに盲従しないというところがあります。どこが盲従しないかという

と、三経だけしか挙げなかった。そして一論、浄土論というのを挙げたのです。

浄土論は天親菩薩の「世尊我一心 歸命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」、それは道綽も・善導も浄土の經典として挙げなかつたのです。わざと挙げなかつた、考え方が違つたのです。そこに大事なところがある。浄土の經典というものは何なのか。法然聖人はこのことが非常にはっきりしているのです。

浄土の經典とは「選択本願念仏」が明らかにされている経。大経には三輩往生、上輩・中輩・下輩のところに往生ということが出ています。それは大経の下巻の初めです。

「凡そ三輩有り。其の上輩とは、家を捨て欲を棄てて沙門と作り、菩提心を発し、一向に専ら無量寿仏を念じ、諸の功德を修して彼の国に生ぜん」と願ぜん」

中輩は「当に無上菩提の心を発し 一向に専ら無量寿仏を念ずべし」

下輩は「一向專意に乃至十念、無量寿仏を念じ、其の国に生ぜん」と願ずべし」

大経に選択本願念仏が出てゐる。觀経は勿論、「汝好く是の語を持って。是の語を持つてとは即ち是れ無量寿仏の名を持つてとなり」

阿彌陀経は「執持名号」「若一日 若二日」、それが出てゐる。

そのほかのお経は、選択本願念仏というところから言うて遠い。そこで中心としてこの三つを上げた。これはものを見る眼が非常にはつきりしているのです。まあとにかく念仏が書

いてある、というようなものではない。その念仏が、本願の念仏というはつきりしたものを言っている。

『浄土論』を挙げた理由

三經一論の一論は既に申すように『浄土論』であって、他の人は入れなかった。法然だけがこの一論を挙げたわけであります。

なぜ善導も道綽も挙げなかったかという点と、内容が十分に理解できなかったという点もあると言わねばならん。

浄土論の中心は止観。作願門・觀察門が中心になっている。

念仏というのを必ずしも挙げていないと思われるところがあります。浄土論は止観に重点があるように見える。これが道綽と善導が挙げなかった理由である。道綽・善導は用いず。

法然が入れたのは何故か。法然は源信和尚の『往生要集』によったのである。源信和尚は『浄土論』を非常に大事にしたのです。『要集』の中心点は第四正修念仏門ですが、これは『浄土論』の五念門によって書かれたものであります。

その中で源信・法然の心を打ったものは何か。それは觀察門。観ができれば一心称念・行住坐臥。觀察というのは、奢摩他毘鉢舍那しやまたびぼしやなの毘鉢舍那の方ですが、「外儀の姿は異なりといえども、心常に念仏して、念々相續寤寐に忘ることなかれ。」觀察門は念仏申せの内容なのだというのが、源信和尚の『往生要集』の解釈。

これが非常に法然聖人を打ったのです。「寤寐に忘ることなかれ」「寝ても覚めてもへだてなく」、これが法然聖人の心を

打って、浄土論は念仏が説いてあるのだということを、法然聖人は源信和尚によって教えられた。

そこに、善導・道綽と違ってこの『浄土論』を三經一論として挙げたわけです。このことが親鸞聖人を大きく育てることになった。

これは法然聖人のお蔭です。法然聖人が浄土論を紹介しなされたようなものである。それはしかし源信に依っている。

親鸞聖人は、曇鸞・天親をいただいて、そこから回向の宗教というものを明らかにしなされるのですから、先生によって育てられた人です。

『往生要集料簡』、これは法然聖人が『往生要集』を頂いてその料簡を書かれた。それによると、「念仏は觀察門の異名なり」、これが法然聖人の領解である。念仏門に觀想と称名があり、今称名を重んじたのが觀察門である。

善導は觀察というのは聖道門の行であって、念仏とは関係ないと考えた。そこが源信と違うところです。

以上のようなことで、そこに三經一論というものを明かされたのは、法然聖人独特の天地であって、中国の方々と一寸違った領解が出されているわけであります。大体そういうところで本師源空の立教開宗というところを終わっておこう。まだ充分ではなかったので、『選択集』に入った時にもう一度やり直しましょう。

片州濁世のともがら

最後に、

「片州濁世のともがらは、いかでか真宗をさとらまし」

片州の片は、木片、きれつばし、また瓜の種を言うのもあります。片州と言え、小さな島、小国。後の方の和讃に「粟散片州」というのがある。こういう小さな国に真実の宗教を興すということは、非常に困難なのであります。

小国の特徴。小さな国というのはどういふところに特徴があるか。小さな国の人は狭量の人が多いと申します。そして派閥意識、対立意識、グループ意識が強い。日本は全部そういうところがあるのでしよう。私のところは九州という島です。大きな島ですが、島の者は何々の浜、何々の浦というところまでまとまりやすいのです。昔はそういうところに、盆踊りで他所の村、他所の浜の者が来ると袋叩きにおおたとか言います。団結して人をなかなか入れない。対立意識が強い。

日本は島が多いのですが、小さいのはやはり韓国です。韓国というのは対立意識が強いでしょう。悪口ではなしに一般的にそういうのです。優越感と劣等感が強い。

我々は大和民族とか、万世一系の天皇とか、大日本帝国とか何とか言って威張っておった。小さいものほど大きいという字を付けたがる。大日本帝国とか、大韓民国。世界で言えば、イギリスは大英帝国。グレイトブリテン。グレイト、大英、威張っているんです。人を見下げています。

会田雄二という人の『アーロン収容所』というのがあります。あの人はビルマ戦線でイギリス軍の捕虜になった。捕虜とか

日本人とかは人間と思っていないのだそうです。作業があつてイギリスの兵隊が色々の仕事を言いつける。ある兵隊が帰つて来て憤慨していたそうです。イギリスの女性の兵隊が、自分の目の前で下着を脱いで、これを洗濯せよというのだそうです。人間だと思つてないから何でもないので。こういう優越感を持っている。

イギリスに行つてみると、いたるところにコンチネンタルと書いてあります。大陸風の料理とか、大陸風の洋服仕立て屋とか書いてある。コンチネンタルスタイルと書いてある。これはどういふことか。自分が小さな国だから、大きな所に対して劣等感を持っているのです。フランスとかドイツに対してです。日本も同じだと思ひました。

片州濁世のともがらはやりにくいんです。浄土真宗をさとらまじなのです。そういう新しい教え、本当の教えというものに馴染まないのです。今まで自分が信じておつたものが一番いい、「なあ、そうだろう」と団結するのです。聞こうとしないのです。

本師源空、このような中を広めていかれたのは本当にご苦労でありましたと、聖人は感謝しておられるのです。

このような小さな国で本当の宗教を興す、それも広めていこうとするには、大変な御努力がありました。小さな国の者は器量が小さい。スケールが小さくて対立意識が強かった。そして優越感と劣等感をもって、人を見下げることは知つているが、なかなか本当のものについて行こうという広い度量がないということを言っている。

いかでか真宗をさとらまし

「いかでか真宗をさとらまし」真宗をさとりとは何か。真宗とは真実の教・行・信・証。本願の教えの中にこもる行、如来の南無阿弥陀仏、それを頂いて、頭を下げて念仏申す。教行至り届いて信証を生ず。そこに、自身は現に罪悪生死の凡夫と目覚めていく。そういうことは、片州濁世のともがらは、到底できることではない。優越感と対立意識の中でこの教えは非常に広まりにくい。

本願の教えを頂いて南無阿弥陀仏、光明に照らされて、頭を下げて念仏申す。教行至り届いて信証を生ず。それは謙虚な人でなければ到底出来ないが、その中で法然も親鸞も五年の刑に処せられて、流し人となっていくのである。

実にそういう辛苦艱難をもつともせずによつて下さったということを、今親鸞聖人が法然聖人に感謝しておられる。

「善導・源信すすむとも 本師源空ひろめずば

片州濁世のともがらは いかでか真宗をさとらまし」

実に法然聖人に対する、親鸞聖人の深い感謝の思いがこもっています。

